

市民キュレーターワークショップレポート（平成 26 年度・冬季）

【レポート目次】

[その 1 ワークショップスタート！](#) pp.1-3

[その 2 市民キュレーターさんの紹介](#) pp.4-5

[その 3 中間発表を行いました！](#) pp.5-6

[その 4 展示タイトル・企画内容が決まりました！](#) pp.6-8

[その 5 展示作業を行いました！](#) pp.8-11

[その 6 ギャラリートークを開催しました](#) pp.11-13

[その 7 展覧会終了！～撤収作業と修了式～](#) pp.13-15

[その 8 市民キュレーターワークショップを終えて（感想文）](#)
pp.16-19

〈ワークショップスケジュール〉

平成 26 年

11 月 15 日

開講式・オリエンテーション

12 月 6 日

中間発表

平成 27 年

1 月 12 日

展示作業

1 月 13～24 日

展覧会開催

1 月 17 日（展覧会期中）

市民キュレーターによる

ギャラリートーク

1 月 25 日

撤去作業・修了式

〔展覧会名〕 open your box

—5 人の市民キュレーターによる、大阪府 20 世紀美術コレクション展—

その 1 ワークショップスタート！

11 月 15 日（土曜日）に市民キュレーターワークショップがスタートしました。

この日は開講式とガイダンスが行われ、公募により選ばれた 5 名の市民キュレーターが、大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）4 階のライブラリーにて初の顔合わせとなりました。

はじめに大阪新美術館建設準備室の菅谷研究主幹より開講のご挨拶がありました。

菅谷研究主幹は市民キュレーターの方々に「展覧会をつくるために、キュレーターがどのような仕事を行っているのかを体験してもらいたい」とお話ししました。



次に市民キュレーターとスタッフの自己紹介を行いました。簡単な自己紹介の他に、「最近体験して良いと思った芸術体験」や「最近あった、楽しかった・嬉しかったこと」について話していただきました。

年齢も性別もアートに対する考え方も違った方々が参加されていて、これからどんな展覧会が出来上がるのか、とても楽しみです。



そのあと、今年度の夏季に行った市民キュレーターワークショップに参加された“先輩市民キュレーター”の林さんからお話を伺いました。展示する作品の選び方や、展示の際の工夫などを、夏の展覧会の写真スライドと共に分かりやすく教えていただきました。



そして、実際に展示を行う会場を見学しました。自分の展示空間をどんな風につくろうかとイメージを膨らませながら、それぞれの希望のスペースを考えます。ライブラリーに戻ったあと、スペースを選ぶ順番をくじ引きで決め、各スペースの担当者が決定しました。

休憩中にチラシとホームページのために市民キュレーターの方々の個人写真を撮影した後、大阪府の中塚主任研究員から大阪府 20 世紀美術コレクションについてのレクチャーを受けました。どのような作家の作品をコレクションしているのか、またその作品の探し方や文献の紹介など、展覧会をつくるために大切なことをお話していただきました。



最後に、展覧会タイトルを決めました。事前に市民キュレーター、先輩市民キュレーター、スタッフから展覧会タイトルの候補を募集していたこともあり、全部で 18 個の案が上がりました。タイトルに込める想いについての白熱した話し合いを経て、展覧会タイトルは、「open your box ～5 人の市民キュレーターによる、大阪府 20 世紀美術コレクション展～」に決定しました。

著作権やこれからの作業に関する注意事項の連絡のあと、場所を enoco の地下にあるカフェに移して、会費制による懇親会を行いました。打ち解けた雰囲気の中、展覧会への意気込みなどを和気あいあいとお話しし、楽しい時間を過ごしました。



これからは個別に展覧会のイメージを固め、作品を選ぶ作業に入っていきます。
どのような展覧会が出来上がるのでしょうか。ワクワクしますね。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その2 市民キュレーターさんの紹介

今回の展覧会をつくる、5人の市民キュレーターさんをご紹介します。

有賀千洋さん

1951年生まれ。アフター5は、立ち飲みで「とりあえずビール」。典型的な「昭和の親爺」。3年前、定年退職。決して悠々自適ではなく、なんとはない「寄る辺の無さ」に鬱々とした毎日。趣味でやっている活動はいくつかありますが「これ！」と打込めるものがない。そんな時に出会ったのが「市民キュレーター募集」のチラシ。絵は描けませんが、絵を見るのは好きで、「昭和の親爺」が企画を通じて何かメッセージを発信できれば、と思います。



上林恭子さん

新しい自分を発見したくて、市民キュレーターに応募しました。これまでは“アートって近寄りがたい”と感じていました。でも、一歩踏み込めばとっても楽しいことに気づきました！作品に一目ぼれして、癒されて、パワーを貰って、ドキドキ・ワクワクの連続です！展覧会づくりの生みの苦しみも楽しみたいと思います。



木村優介さん

時代の最先端などの新しい物事が好きなので、新感覚を味わえる現代美術が好きですが、現代美術はコンセプト重視の傾向が強いため、作品を理解するのが難しいです。きっと、このままでは、現代美術と鑑賞者の距離は遠のき、現代美術は廃退してしまうので、これから求められるのは「わかりにくいものをわかりやすく」する通訳力のあるキュレーターだと思っていた矢先、市民キュレーターの募集があり、あわてて参加の申し込みをしました。



永田由佳子さん

芸術大学は出たものの、芸術とは関係のない仕事に就き、いつの間にか芸術に親しむ時間が少なくなっていました。それがこの夏40歳を迎えたのを境に、無性に芸術と向き合いたくなり、展覧会やイベントへ参加する機会が増えていきました。そんな中、偶然見つけた市民キュレーター募集。展覧会を企画できるなんて、夢のような話です。自分の感性や感覚を表現・発表する場を与えて頂いたことに感謝し、存分に楽しみたいと思います。



野口菜々さん

3歳と0歳の姉妹の母です。あわただしい育児の中で、思いがけない子どもの視点と発想に、びっくりさせられる毎日を過ごしています。出産後は、以前より好きだった美術館やギャラリーへ足を運んで作品と触れ合う機会が、めっきりと少なくなりました。このワークショップを通じて再びアートに向き合い、こどもをテーマにした展示の中で、まるで生きるアートのような子どもの頭のなかを少しでも感じられたら、と、楽しみにしています。



(お名前の五十音順です)

年齢も性別もお仕事も違う5人の方が、アートに関わりたいという想いのもと、こうして集まりました。アートに対する考えは様々ですが、それぞれの想いをいかしたスペースが並ぶ展覧会になることでしょう。「open your box ―5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展―」は2015年1月13日から始まります。あなたも感性の“箱”をあけてみませんか？

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その3 中間発表を行いました！

市民キュレーターワークショップの中間発表が、先日12月6日（土）に大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）の4階ライブラリーにて行われました。11月15日に行われた開講式・オリエンテーション以降、市民キュレーターさんには何度かenocoまで足を運んでいただき、この中間発表に向けて展覧会の案を練りあげてきました。展覧会タイトル案やコンセプト等をまとめた上で、具体的に展示しようと思っている作品リストや作品の配置図などが詳しく書かれた資料やパワーポイントを用いて、5名の市民キュレーターの方にそれぞれ発表をしていただきました。



市民キュレーターのみなさんの発表は、作品を選んだ意図などもしっかりと述べられており、5人それぞれの個性がいきた展覧会の案を出されていました。展示方法や配置にまでこだわって考えられていて、展示空間のイメージがしやすく、とても素晴らしい発表でした。何人かの市民キュレーターさんが同じ作品を選んだ場合は、重複する作品の調整を行わなければなりません、今回はどの作品も被りませんでした。作品を選ぶ際に、カタログに載っている作品だけではなく、それらを出発点に膨大なコレクションの中から自分のコンセプトに合うものを見つけ出した、市民キュレーターさんの努力が窺えます。



スタッフから作品の配置について「大きな作品と小さな作品が交互に並ぶと、観客は寄ったり離れたりと忙しく動かなければならないので、展示する際は人の動きや流れも考えた方がいい」といった、展示のポイントについてのアドバイスなどがありました。

市民キュレーターさん5名をはじめ、スタッフと先輩キュレーターさんを合わせた13名で積極的な意見交換が行われ、とても有意義な発表となりました。

この中間発表を通して、自分の展覧会の案を見直し、より具体的な案に練り直すことが出来るのではないのでしょうか。今後は展覧会タイトル、作品リストを最終決定し、パネル類の作成に入っていきます。どんどんと展覧会が出来上がっていく様子を、これからもお伝えしていきたいと思います！

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その4 展示タイトル・企画内容が決まりました！

12月6日に中間発表を終え、5人の市民キュレーターさんたちが考えるそれぞれの展示のタイトルと企画内容が決定しました。どれも魅力的な企画内容になっていて、わくわくするタイトルばかりです。

有賀千洋さん

〈世界はとてもやっかいだ でも そう捨てたものではない〉

作家も技法もバラバラで、ただ直感で私が選んだのは、結局「力のあるもの、人間くさいもの」。主に選んだ「大阪トリエンナーレ」の作品は90カ国からの、個性あふれる作品群で、改めてアジアやアフリカの作家さんが抱えておられる困難さも感じました。あわせて人間が本来持っている大きなユーモア（人間性）の力も。個性あふれる作品をどう並べるか、お隣になった作品どうしが、お互いに会話をかわし、また私たちに別の言葉を語りかけてくれれば、嬉しいなと思います。

上林恭子さん

『素材』と『技法』を楽しむ“あつまりの作品” ～じっくりじっくり観てみよう！～

キャンバス・板・布・糸・紙…色々な素材を使った作品、コラージュ・エングレービング・フロタージュ・運針…多様な技法を駆使した作品、これらの作品を知り、私はアートの奥深さを実感し、魅了されてしまいました。緻密な作業、丹念な手技により生み出された『素材』と『技法』が楽しめる“あつまりの作品”は、離れて観れば作品全体のあつまりを感じ、近づいて観れば素材や技法を味わうことができます。じっくりじっくり鑑賞し、作品を二倍楽しんでいただければと思います。

木村優介さん

〈Dance〉

音楽で踊れるなら、絵画でも踊ればいいじゃないか！音のない絵画で踊れるって面白いし、新しい不是吗？では、どうすれば、絵画で踊れるのでしょうか。それは、共感覚（絵で音を感じる）体験をすることです。

本展では、絵のモチーフ、構成、素材、展示方法で、音楽自体を空間表現しています。共感覚体験する音楽は、クラブミュージックのJazz、House、Technoの3つあり、絵画作品を3つのジャンルに分けて展示しています。共感覚体験ができる絵画展で、ぜひ、踊ってください。

永田由佳子さん

〈Yellowー心を照らす 美の灯りー〉

黄色とは・・・

- (1) 有色の中で最も明るく、光のイメージに近い色
- (2) 左脳に刺激を与えて活動を高め、心の不安を解消するパワーのある色
- (3) 警告色として注意を促す色

私は黄色に惹かれます。きっと、黄色のパワーと警告が私には必要だからなのでしょう。皆様も黄色の作品の前で一度立ち止まり、自分の心と向き合ってみませんか？

野口菜々さん

〈空想アンソロジー〉

日々子どもと接していると、その発想力と、想像の豊かさにいつもおどろかされます。そして、ふと思い出すのは、自分自身が子どもの頃に空想していた、空を飛んだり、未知の空間に入り込んだような不思議なイメージの断片的な記憶。今回は、様々な作品の中から、子どもの空想にでてくるような、幻想的でどこか不思議なイメージを持つ作品を中心に選びました。それぞれの作品の世界に、自分自身が入り込んだ感覚で楽しんでもらえればと思います。

企画内容と展示のタイトルが決まりましたので、これから市民キュレーターさんが作成した、展示したい作品のリストを基に、作品が展示出来る状態かどうかコンディションチェックが行われます。その後、展示する作品が最終決定され、キャプションづくりへと作業は進んでいきます。今後は展示作業の様子なども、皆様にお伝えしたいと思います。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その 5 展示作業を行いました！

1月12日に展示作業を行いました。今回は、その時の様子をご紹介します。

作品を搬入する前に、移動式の壁を使って展示室に5つの部屋をつくります。それらの部屋に、それぞれ展示予定の作品を振り分けていきます。



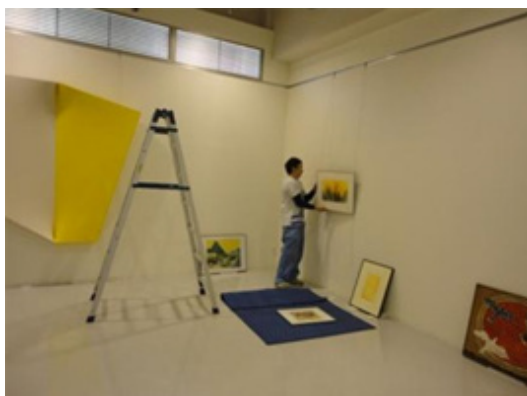
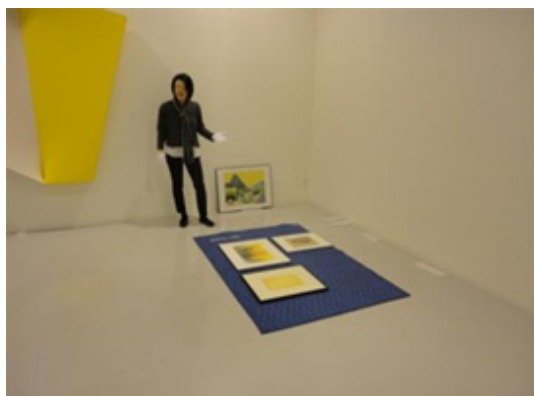
作品は梱包された状態のまま、まずは展示する予定の場所の壁に立てかけていきます。その際、作品保護のため梱包材を使って作られたクッションを作品の下に敷き、床に直接作品が当たらないように注意します。また、作品に触れる際は白手袋を使うなどして、作品が傷まないよう心がけます。



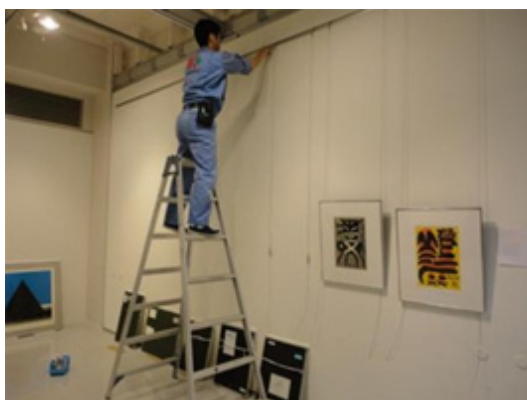
壁に立てかけた状態で、横の配置を決めていきます。実際の作品を見て、最終的な配置を決定し、作品同士の幅の調整も行います。

次に高さを決めていきます。

基本的には、目線が作品の中心になるくらいの高さにしますが、不規則な配置にするときは下の写真のようにまず床で壁の構成を考えます。そしてその配置のまま、壁に作品をかけていきます。



展示するためのワイヤーをたらしめます。そのワイヤーについているフックに、絵の方にもつけておいたフックを引っ掛けて壁に取り付けていきます。この時、平行になっているか確認するために水平計を用いる時もあります。



ワイヤーに絵をかけたら、専用のステープレラーで壁にワイヤーを固定します。固定をしないと、絵の上辺が壁から浮いて不安定になってしまいます。



今回の作品の中には、壁に直接ピン打ちするものもありました。

作品の展示が終われば、キャプションをつける作業を行います。まず、キャプションをどの位置につけるかを考えます。作品の真下につけるのか、右下や左下につけるのか、作品から離れたところにつけるのかなど、実際にキャプションを置いてみて決めていきます。位置や高さが決まれば、平行になるように注意しながらキャプションを貼り付けます。

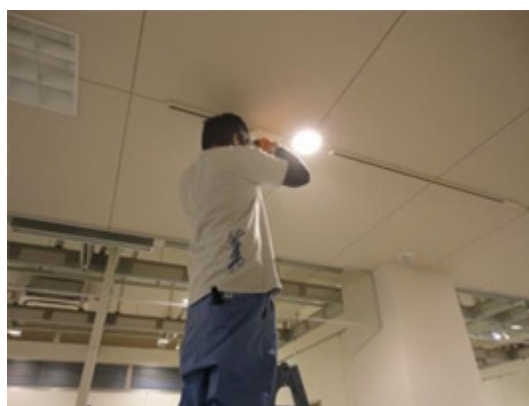


各部屋の入り口に、市民キュレーターさんの紹介やコンセプトが書かれたパネルをはります。このパネルは釘でピンに打っていきます。パネルの側面から斜めに打ち、パネルの正面からはピンが見えないように工夫されています。



最後に照明を調節します。

作品に均等に光が当たっているかどうかや、部屋全体の雰囲気などを考えながら調節していきます。



全ての展示作業が終わったあと、市民キュレーターさんに最終確認をしていただき、この日の作業は終了となりました。大きなハプニング等も無く、無事に五人全員の展示空間を完成させることが出来ました。選ばれた作品、コンセプト、作品やキャプションの配置など、それぞれの市民キュレーターさんがこだわって考えに考えを重ねられた、すてきな空間に仕上がっています。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その6 ギャラリートークを開催しました

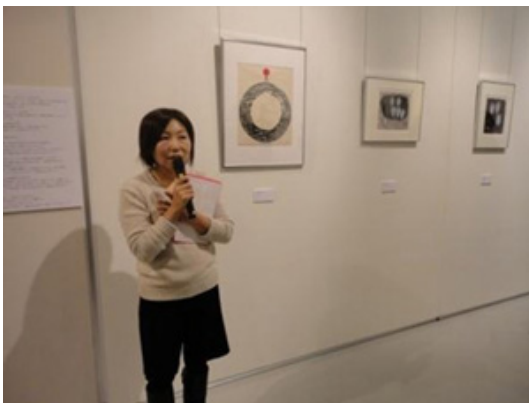
1月17日(土曜日)に、展覧会場である江之子島文化芸術創造センター(enoco)の展示室1にてギャラリートークを開催しました。

5人の市民キュレーターさんに、自身の展示に込めた思いなどを話していただきました。

ギャラリートークは野口菜々さんの部屋からはじまりました。

野口さんは「空想アンソロジー」と名付け、子どもの空想に出てくるような不思議なイメージを持つ作品を選ばれました。

一点一点の作品について、選んだ理由や作品の情報などを詳しくお話ししていただきました。



続いて、「Yellowー心を照らす 美の灯りー」と題し黄色の作品に注目された永田由佳子さんにお話しいただきました。

あえて黄色の作品ばかりを集めるのではなく、色味の少ない作品と黄色の作品を組み合わせることで黄色を引き立たせる、という工夫を話されているのが印象的でした。

三人目は、有賀千洋さんにお話ししていただきました。ご自身の好きな作品を選んでいくと「人間くさい」作品が集まり、展示のタイトルは「世界はとてもやっかいだでも そう捨てたものではない」となりました。有賀さんの作品解釈を織り交ぜながら、作品の詳しい解説などをお話ししていただきました。



上林恭子さんは「『素材』と『技法』を楽しむ“あつまりの作品” ～じっくりじっくり観てみよう！～」と題し、素材感の異なる作品を集めて展示されました。

この展示内容に至った理由などをお話しいただき、作品をじっくり見ると見えてくる面白さなどを教えていただきました。

最後は、絵画と音楽の共感覚に注目し、「Dance」という展示タイトルのもと「House（ハウス）」「Jazz（ジャズ）」「Techno（テクノ）」の空間を美術作品で表現された木村優介さんにお話ししていただきました。

それぞれのジャンルの音楽を流しながら、展示の工夫についてお話されました。ギャラリートークの最後に、木村さんが考えられた展示空間で、ダンサーの aloha（アロハ）さんのパフォーマンスがありました。



「House」のリズムのタップ音だけが録音された音源に合わせて、即興で踊られていました。

ワークショップの集大成といえるこのギャラリートークは、たくさんの方にお越しいただき大盛況でした。市民キュレーターさんのお話を聞いて、展覧会を身近に感じ、それぞれの空間の違いを味わっていただけたのではないかと思います。

（大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子）

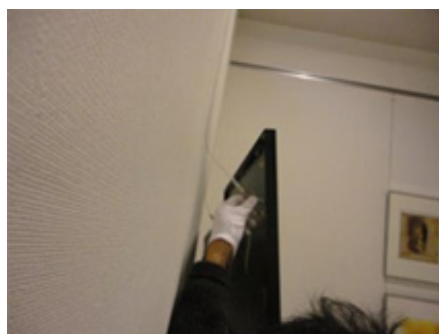
[\[レポートトップへ\]](#)

その7 展覧会終了！～撤収作業と修了式～

1月24日（土曜日）に、市民キュレーターによる展覧会「open your box ―5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展―」が終了しました。ご来場いただきました皆様、ありがとうございました。

翌日の25日に、撤収作業と修了式を行いました。

額装されている小さな作品は、市民キュレーターさんご自身でワイヤーから取り外し、梱包作業を行いました。



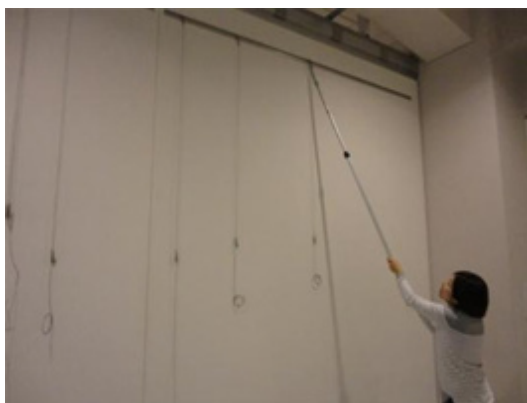
展示作業の時と同じように、作品保護のため白手袋を着用して、作品は慎重に取り扱います。

ワイヤーから作品を外した後は、床に直接作品があたることの無いよう、梱包材などの上に一度おろします。



そのあとは、一つ一つの作品を丁寧に、市民キュレーターさんに梱包していただきました。

作品の梱包が終わった後は、パネルやキャプションをはがしたり、ワイヤーを固定していたステープラーを抜いたり、ワイヤーを外す作業を行って、全ての撤収作業が完了しました。



撤収作業終了後、市民キュレーターのみなさんにお集まりいただき、展示室1の一角にて修了式を行いました。



修了式では、市民キュレーターの方々に、このワークショップ全体を通しての感想を、それぞれ簡単に話していただきました。

展示内容を決定するまではいろいろと悩んだが、無事に終わってほっとしている、と思われている方がほとんどでした。

他には、「大人になってからこのような経験が出来たことは宝になる」「このワークショップをきっかけに、これからは展覧会に足を運ぼうと思った」などの嬉しい感想もいただきました。

今後の課題としては、作品選びの際に、カタログに載っていないコレクション作品もスムーズに閲覧出来るように工夫出来ないか、という意見が出ました。

学芸スタッフからは、「今回のワークショップを通して、作家さんとの運命的な出会いをした市民キュレーターさんが多く、これをきっかけにお気に入りの作家さんをつくっていただけたのは嬉しいこと」との声があがりました。

市民キュレーターのみなさんは「一から展覧会をつくる」という体験の中から様々なことを感じ取り、貴重な経験をされたことと思います。

次回のレポートでは、市民キュレーターさんそれぞれの感想を掲載します。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 柴田美帆子)

[\[レポートトップへ\]](#)

その8 市民キュレーターワークショップを終えて（感想文）

◇有賀千洋さん

まずは、支えていただいたスタッフの皆様、作家さん、そしてお客様に感謝です。作品選びでは、とにかく「力のあるもの」ということであまり迷わず選べました。ただコンセプトは何？と問われて悩みました。中間発表のプレゼンを前に、スマホで撮った作品の写真をパソコン上で、壁面ごとに並べているうちに、ふと思いついたのが「世界はとてもやっかいだ でもそんなに捨てたものではない」というタイトル。「力のあるもの」というのは、メッセージ性が高い作品だと思います。悩んだのは、作家さんが作品に込められた思いと私の思いをどう整理し、作品をどうお客様に紹介するか？でした。最終的には、作家さん自身のメッセージと、自分が作品から感じた印象を並べた「パンフレット（紹介文？）」を会場に置く、ということではなんとかバランスはとれたかな？と。実際に展示をしてみて、最後はやはり各作品が持っている力に助けられたと思います。作家さんに感謝です！



◇上林恭子さん

市民キュレーターとしての活動は、私に現代アートの奥深さと楽しさを体験させてくれるものでした。何と云っても、一番の醍醐味は作品の展示作業です。紆余曲折を経て、私の展示に選んだ作品との初対面の場！本物が醸し出す迫力にメロメロになってしまいました。一つ一つ作品を確認しながら、やっぱり選んで良かったと感無量！でした。



ギャラリートークではとても緊張し、準備してきたペーパーは全く役に立たず…。皆さんに思いが伝わったかどうかとか、もう少し練習しておけばよかったな～と、反省することとなりました。

他の市民キュレーターの方々の展示も、とても魅力的で個性的で、たくさんの良い刺激をいただきました。

このワークショップを通じ、学芸員の皆さんをはじめ、たくさんの関係者の方々と交流できた事は、今後、私の成長の糧になることと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

◇木村優介さん

キュレーターは、作品や作家の意図を理解しなくて良いのかと考える瞬間がありました。私の企画「絵で踊る展覧会」での「絵画で音楽を感じる」とは、作家（上前智祐、津高一、森口宏一）の意図ではないので、キュレーターの目的が「作品や作家の意図を理解し、見合った展示をする」という狭義の目的であるなら、私の企画は実施不可だと、企画段階では思っていました。しかし、実際は、あっさりと企画の実施は可能であったため、安堵したことを強く覚えています。おそらく、抽象画そのものの捉え方の一つとして、音楽として捉えることが有り得るため、「絵画を音楽として捉える」ことが、キュレーターの試みの許容範囲内とみなされたのだと思います。本ワークショップにより、キュレーターの制約と自由を体験し、キュレーターそのものの理解を深める貴重な経験ができました。ありがとうございました。



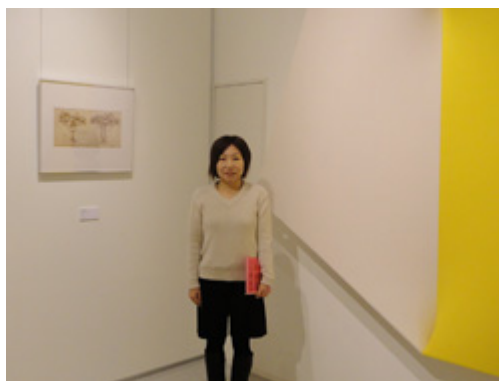
◇永田由佳子さん

昨年11月半ばからの約2ヵ月間、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。

家事・育児・仕事の他に、市民キュレーターとしての時間が加わり、

展覧会の企画や準備がままならない期間もありましたが、悩み苦しむことさえ楽しんで取り組んでいる私がいました。

存在すら知らなかった作品や人との出会い、自分の感性や感覚の再認識等、それまでの生活では決して得られないものを、この経験から沢山得ることができたと思います。



ギャラリートークでは、想像以上の来場者の多さに圧倒されて、緊張でガチガチになり、皆様にうまく伝えられたのか疑問ですが、それはそれで良かったのだと思うことにします（そのガチガチも含めて私の展覧会のカラーだと思うので）。

また、展示作品の作家さんがご来場頂いていたことを後で知り、胸が熱くなりました。

こういう出来事の一つ一つが、今後の人生の糧になるのだなと、今しみじみ感じております。

ありがとうございました。

◇野口菜々さん

私は、このワークショップを通じて、沢山の新しい出会いを経験しました。4人の市民キュレーターの方々を始め、協力していただいた関係者の皆さん、展覧会を見に来ていただいた全ての方々、そして何より、素晴らしい作品たちとの出会いです。



展覧会を開催するまでに、2ヶ月間、何度も図録の作品とにらめっこしながら、頭の中で構成を考えていましたが、実際に作品が搬入された空間は、エネルギーに溢れ、濃密な空気が漂っていました。そう感じるのには、作品と対峙しているうちに愛着が湧いたからかもしれませんが、やはり、それぞれの作品の持つ力なのだろうと思います。

ワークショップでは、コンセプトを考え、作品の選定、搬入、展示、搬出までの展覧会開催のプロセスを体験して、ひとつの展覧会に、そのキュレーターの様々な思いがこめられていることを学びました。

これを機に、アートへの興味がさらに高まったので、これからもまた、新たな作品との出会いを見つけていきたいと思います。このたびは、素晴らしい機会を与えていただき、ありがとうございました。

スタッフより

◇福元葉子（大阪府立江之子島文化芸術創造センター 企画部門 学芸担当）

今回は、市民キュレーター展の担当になって2度目の参加となりました。市民キュレーターさんの企画される展覧会が充実したものになるように、今回も皆さんと一緒に悩み行動したつもりです。

まず、展覧会を企画するにあたって、市民キュレーターさんは、大阪府20世紀美術コレクション約7800点のなかから出品作品をえらびます。偶然見つけた作品を出発点に展覧会テーマを設定される方、あらかじめ考えておいたテーマをもとに作品を選定される方と、その過程はさまざまでした。ただ、気に入った作品を好きなだけ出品できるわけでは、もちろんありません。市民キュレーターさん各自の個性的な閃きや発想は損なわず、しかし現実的な出品可能性についても考慮する、その調整作業は、毎度のことながら、私にとって大仕事でした。必ずしも全ての希望にそうことはできませんでしたが、それでもできあがった展示は皆さんの努力のたまもの！思いが形となる、素晴らしい体験だったと思います。お疲れさまでした。

◇清原佐知子（大阪新美術館建設準備室 学芸員）

市民キュレーターのみなさん、長丁場のワークショップを“完走”されて、お疲れ様でした。今回は年末年始を挟んでとくに慌ただしい日程となりましたが、そんな中でも熱意を切らさず、数ある課題に取

り生まれ、5名それぞれに素晴らしい展示をつくってくださったことを、大変嬉しく思います。本当にありがとうございました。

今回とくに印象深かったのは、この展覧会づくりを通して特定の作家や作品への関心や親しみが深まったという声を、何人もの方からいただいたことです。この体験が、みなさんの今後の美術との関わりや学びがより一層豊かになるきっかけとなれば幸いです。

美術館の責務の一つはすぐれた美術作品を後世に残すことです。それは作品への物理的な配慮だけでは不十分で、人々の心や記憶に残ってこそ作品はその生命をよりよく保つものと考えます。心や記憶に結びつくような作品との出会いの場を、本事業を含め様々な形によって今後も提供し続けることが重要だと、改めて実感しています。

◇柴田美帆子（大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ）

わたしは美術館に行くことが好きで、かねてより美術館で行われている仕事にとっても興味がありました。今回のワークショップは、その中でも大きな仕事のひとつである「展覧会をつくる」というプロセスを勉強することが出来ると思い、インターンに応募しました。このワークショップでは、展覧会がつけられる過程だけでなく、「作品の取り扱い方」や「展覧会にはキュレーターの思いがたくさん込められていること」、「作品を見る人のことを良く考えて展示していること」、「展示企画を考える難しさ」、「キュレーターには、作品のコンディションの善し悪しによって、考えていた展示企画を変更する臨機応変が必要なこと」など、インターンとして関わっていなければ知ることが出来なかったたくさんのことを学ばせていただきました。わたしはこれまで、美術館で展覧会を見るときは「作品対自分、作家対自分」の空間で作品を楽しんでいましたが、このワークショップで、作品と自分との間にはキュレーターの様々な思いが介在しているということに気づかされました。これからは、展覧会を見る目が変わり、もっと展示を楽しむことが出来そうです。とても貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

[\[レポートトップへ\]](#)